

平塚柔道物語 5 5

礼法とは自己コントロール

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

柔道は単なる格闘技ではない。最近の柔道の試合を見ると、勝負面に固執し、試合終了後、ガッツポーズをする勝者が出たり、また負けた選手は大泣きに泣いたりして、礼もきちんと行われぬような、礼法やマナーの乱れが目につきます。あのオリンピックの大会の試合でさえも、そのような傾向があることを否定できない。剣道などは、ガッツポーズをしたら、即刻負けになるほど礼法に厳しいのである。柔道も相手があつてこそ勝つことができる。ゆえに相手に対する感謝と尊敬の心がなければならぬ。その心があれば、ガッツポーズなどとれるはずがない。また負けても、相手から学ぶものがあるという尊敬した心があれば、くやしさを表に出す態度がとれないはずである。柔道においては感情むき出しの心こそ、今後、礼法によって正されなくてはならないのではないのか。

昭和39年10月、東京オリンピックの時、柔道無差別級の決勝にて、日本の神永昭夫選手が、オランダのヘーシンク選手に抑え込みで一本負けした時のことである。「わあー」という歓声の中で、大喜びのオランダ人が試合場の畳に上がり、ガッツポーズをしようとした。その時、手を上げて制止したのは、何とヘーシンク選手本人自身であった。これこそ、日本の柔道精神、礼儀の根幹である。今になって考えてみると、彼は強いだけでなく、日本の柔道の礼法を身につけ、身をもって示した世界の模範のチャンピオンであったのだ。その一年前、私は東京の水道橋にある講道館でヘーシンクの姿をよく見たものだ。彼は日本の強い選手とよく練習をしていたのである。私は思う。彼は日本の柔道家に育てられたという思いを一生忘れなかったのではあるまいか。

先日もフランスの柔道の模様を一時間もののテレビで紹介されていた。礼法を大切にしていることが国として評価をしているようだ。1992年バルセロナ・オリンピック金メダル、1996年アトランタ・オリンピック銀メダルの

保持者の古賀稔彦氏が指導の際、フランスで簡単なアドバイスをしたら、丁寧にしかも「アリガトウゴザイマシタ」と日本語で感謝の意を表したことに驚いたという。

全日本柔道連盟が発行している「柔道への想い」の冊子の中でも、この問題について、次のように指導している。「礼をきちんとするには、興奮している心、気持ちを自分でコントロールし、その興奮している心を自分で鎮めなければ、きちんとした礼はできません。その行動が取れることが自己の内面を形成することにつながり、克己心を育てることになると思います。人生においても、自分の思い通りにならないことは沢山あると思います。昨今の新聞・テレビなどを見ますと、毎日のように、殺人や相手を傷つけるニュースを沢山見かけます。自分の思うようにならないからと言って、相手を傷つけたりしていいのでしょうか。自分の思い通りにならなくても、面白くないがあつても、自分で自分を制し、自分をコントロールできるような人間にならなくてははいけません。その役に立つのが礼法です」とわかりやすく、しかも具体的に紹介されている。ゆえに自分をコントロールする礼法を優先したいものだ。

講道館柔道の創設者である嘉納治五郎先生の「精力善用・自他共栄」という言葉の意味は「心身のすべての力を社会の善いことのために用いること、そして相手を敬い信頼することで自分のみならず、他者とも栄えていくこと」とある。柔道とは、目的・理念共に大変奥が深いスポーツであることを私自身確認させられた。



東京オリンピックで、神永選手をけさ固めで破ったヘーシンク選手、興奮して試合場に駆け上がりとうとしたオランダ人に手を上げて制止した。